

らです。ちなみに、これも悪徳業者が関わっているケースなのですが…。私どもからすれば、そもそも、年間50万匹近い犬猫を殺処分する社会がなぜ子犬を輸入する必要があるのか……という明白な疑問を抱かざるを得ません。神戸市の保健所が発表した数字によると、処分されたペットの80%は子犬／猫です。狂犬病が海外から国内に持込まれる危険性があるというのなら、子犬の輸入を絶対禁止にすれば済むことではありませんか？ それができない理由は……言うまでもなく「金」です。輸入ペット数は過去3年間で1.5%増加しています。少数とはいえ、信頼できる、良心的な地方のブリーダーからも、輸入子犬に対する需要が増え続けています。法規制もなく、巨額の利益をもたらす現実を前にしては、「動物の幸せを第一に」という配慮など期



待する方が無理かもしれません。

2002年、海外の動物福祉会議で、アークのスタッフは英国ケンネルクラブの代表者に会って、英国内の良心的ブリーダーたちが「金儲けのために子犬を海外に輸出しない運動」を進めていることを知りました。ケンネルクラブには日本、中国、韓国、タイのディーラーから大量の子犬を買いたいと定期的に注文が入るものの、この種の要求には絶対に応じられないとのこと。輸出に関する印刷物の中で同団体は次のように述べています。

「当該動物のQOL(生活の質)を最良に保つため、犬を海外輸出するにあたり、ブリーダーと所有者は事前に以下の点に十分な注意を払っていただきたい：

1. 子犬／成犬の最終目的地を正確に把握しておく。
2. 輸出業者は、動物を受け取る人物が誰かを承知しておく。
3. 輸出業者は犬の購入理由と飼育設備を事前調査し、容認できることを確認する。
4. 最終目的地の国が十分に有効な動物保護法を持ち、福祉基準に達しているかどうか

を確かめておく。

5. 上記項目について少しでも疑念がある場合は、犬を輸出してはいけません。」

ブリーダーがこのガイドラインに従う限り、犬を日本に輸出するのはさわめてむずかしいはず。だからといって、この国には信頼できるブリーダーも飼育者も皆無だという意味ではなく、問題は、ペット輸入業界が子犬を「金儲けのための生産品」としか見ないところにあります。現状を変えるには、今以上の管理、規制、監視、法執行の強化こそが欠かせません。市民の側から変化を求め、この分野における一層の努力を行政に働きかけることが大きな力となるでしょう。アークとしても、会員の皆様には是非ともご協力をお願いしたいと思います。日本社会は、動物は「売買の対象となる商品」ではなく、「命ある、感じやすい生き物で、保護とケアの必要な存在」と考えを改めるべきです。これは、国の法律によってなし得るものではなく、市民意識が変わり新しい価値観が浸透してこそ、初めて実現できるのです。

(ジェフ・ブライアント)

Solo's story



Casual breeding

On a cold wet day a woman and a girl appeared at ARK. The girl held a tiny puppy in her hands. It barely filled her hand and was shivering with fear and cold. The woman told us she had brought a female Chihuahua from a breeder and had decided to breed from her. (Of course with the current rampant chihuahua boom, she expected to make a lot of money.) The dog had given birth to three male puppies and this one, now two months old, had been born with no eyes, probably the result of a hereditary defect in the mother or inbreeding. We suggested she neuter the mother, find her a home and keep this little pup, in need of special care, instead. But it was clear she didn't want a handicapped dog to look after and we felt there was a strong risk that she would just dump him somewhere so we took him in.

Fortunately for Solo, the Itoh family decided to adopt him. A wonderful dog-loving family, they have already adopted four 'special needs' dogs from ARK, so we know he will get all the love and care he needs. It's just tragic that amateur ignorant breeders like this abound in this country.

でたらめな繁殖の悲劇

ある雨降りの寒い日、ひとりの婦人と少女がアークを訪ねてきました。少女の両手にはちっぽけな子犬がのっていました。片手におさまるほどの動物は、不安と寒さに震えています。婦人の説明によれば、ブリーダーからメスのチワワを購入し、繁殖させることにしたとか。(昨今の異常なまでの「チワワブーム」に乗かって、ひと儲けを企んだに違いありません。) 犬は3匹のオスを出産しましたが、現在2か月になるその子は生まれつき目が無いのです——おそらく、母親の遺伝性欠陥か、または、近親交配の結果によるものでしょう。私どもが婦人にすすめたのは、母犬は不妊手術をした上で誰かに譲って、特別なケアの必要な子犬を手許に置きなさいというもの。しかし、障害を持った犬の面倒をみたくなないと彼女が思っているのは明らかであり、さっさと捨てられてしまう危険が高いことから、アークが彼を保護したので。そして……幸いなことに、ソロは伊藤さん一家にもらわれることになりました。伊藤さんは、これまでも「特別なケアの必要な」アークの犬を4頭も引き受けてくれた真正正銘の「犬大好き」家族なのです。これで安心……ソロが愛情とケアを十二分に受けられることは間違いありません。それにしても、今回のように無知なアマチュア繁殖家がこの国にあふれているのは、何ともおそろしい悲劇ではありませんか。